

横光利一「旅愁」校異 (二)

佐藤 絹子

凡例

一、本稿に使用した版は次の通りである。

・初出 「東京日日新聞」夕刊（昭和十二年七月三十一日から八月六日まで六回）

「文芸春秋」（昭和十四年五月・六月）

・戦前版 『旅愁』第一篇 改造社（昭和十五年六月）

・戦後定本 『横光利一全集』第十六卷（「旅愁（一）」） 改造社

（昭和二十三年四月）

二、(1) 校異Ⅰには、①初出、②戦前版、③戦後定本三者間の異

同を示す。ただし、便宜的に次のような表示法を採用した。

括弧内は省略した部分である。また i) ii) は形態としては同一であるが、㊦の記号により改稿の時期の別を示した。

i) 初出と戦前版との間に異同があり、戦前版と戦後定本との間に異同がない場合……③（Ⅱ②）↑①の形。

ii) 初出と戦前版との間に異同がなく、戦前版と戦後定本

との間に異同がある場合……③↑（②Ⅱ）①の形。㊦

は戦前版から定本に至る際に改稿されたことを示す記号である。

iii) 初出、戦前版、戦後定本三者間にそれぞれ異同がある

場合……校異Ⅰには＊印を付して③↑①の異同のみを示し、③↑②の異同は校異Ⅱに一括して掲げた。また校異

Ⅰ・Ⅱで㊦をつけたものも加え、全体として、校異Ⅱは戦前版と定本との異同を網羅できるようにした。

(2) 定本の一六九頁四行目から一九二頁五行目までの部分は、

新聞掲載の初出と、「文芸春秋」（昭和十四年五月）掲載分が重複し、改稿されている。校異Ⅲは、戦後定本とこの「文芸春秋」掲載の異稿との異同を示す。なお、㊦の用い方は(1)と同様である。

三、次の諸項のものは、原則として校異の対象としなかった。

(1) 句読点の異同。

(2) 振仮名の有無。

(3) 仮名遣い・送り仮名・同一語を表記する際の用字の異同

(4) 疊語の異同 (例、こゝは↓こゝは)

(5) 改行・行あきのみ異同

四、異同は次の要領で示した。

(1) 漢数字はページ数、□内アラビア数字は行数を示す。

(行あきは、行数に数えない。)

(2) まず定本文の異同の生じている必要最小限の部分を示す。長文の場合は、途中を∧……∨で省略する。

(3) ↑の下に異文を示す。

ナシは、その部分が異文中にないことを示す。

(4) 定本文の行間に異文がある場合には、本文を省略し、
くで行数のみを示し、異文を載せた。

(例) [6] < [7] 「君、聞いたか。」——これは、定本文の6

行目と7行目の間に、異文では「君、聞いたか。」

という文があったことを示している。

(5) / は行の改まったことを示す。

(6) 校異Ⅰの*は、校異Ⅱ参照の意味である。

(7) 校異Ⅰ・Ⅲの⑤については、凡例二を参照。

五、表記は便宜上原則として当用漢字を用いた。

校 異 Ⅰ

一六九④—⑥少しの雲もない……二人は街へ出た。↑朝は一点の雲もなかった。ロココ時代の大きな肖像画のかかった食堂で、矢代と千鶴子は、朝食をすませてから街を歩いた。⑦浮き上つたまま、……海浜に連り立つた↑浮き上つてゐる氷河は、海浜に立つた ⑧見る思ひであつた。……見つけてゐるうちに、↑見るやうな、夢見心地に誘ひ込んだ。しかし、長く見つけてゐると、⑨暈を感じさせる。↑暈を矢代に感じさせる。

⑨土地製の↑ナシ

一七〇①喜ばれる風だつたが、↑喜ばれる風があつたが、②現れに似てゐた。……あまり見えず、↑現れだつた。/ この街は土地の者は少く、③多いらしい。↑多いので、③玩具とか、↑玩具や、④絵にも↑絵にしても、④—⑥悲しさがあ
*り、……生きて来た。↑悲しさや、山の頂から、遠い異国の雲の流れを見はるかす人の姿が多かつた。/ 旅をしてゐると、これらの絵の単純な淋しさも、また矢代の胸の感傷となつて生きて来た。⑦ここは↑ナシ ⑧靴の音の↑千鶴子は、歩く靴の音

の ⑧―⑨建物の間から……立ち停つた。↑建物の隙から、ふと氷河の根が見えると立ち停るのであつた。⑩「東野さんもう戻つしゃれば、↑「東野さん戻つしゃれば、⑪歩いた。↑歩いていつた。⑫―⑬枝を垂らしてゐる……聞えて来た。↑枝を垂らした大樹の間から、鉄色の堅い山脈が、重厚な姿を現してゐるその上に、いつも氷河が流れ下つて天地の悠久さを、物憂げに示してゐた。／「このあたりで休みませう。今日は暑いね。きつと山が焼けて来たからよ。」／白布をかけた露天のテーブルに向ひ合ふと、二人はミルクを注文した。鶯の老けた声や小鳥の囀りが、樹の梢の中から絶えず聞えてやまなかつた。

一七一⑤白い髯の……運んで来る。↑白い髯を生やした老紳士が、杖をつきつき、衰へた足つきで歩いて来た。⑥―⑦千鶴子は……拭きながら、↑ナシ ⑦お作りになるといいわ。↑お作りなさいよ。」⑧と矢代にすすめて笑つた。↑と千鶴子は口についたミルクを手巾で拭きながら云つた。⑨「もう↑「いやもう、⑩ゐると、……分らなくなりますね。↑ゐれば、何をしたいのか分りませんよ。⑪足もとへ擦りよつて来る↑矢代は足もとへ擦りよつて来た ⑫―⑬見降ろしてゐた……なくなつたやうに、↑見降ろしてゐたが、全く張りのなくなつた

人のやうに、⑭―⑮「こんな美しいところで……儲けようつてんですからね。」↑「こんな美しい所で一生棲んでゐたら、人間はつまらなくなるばかりですね。これは平和といふんぢやないですよ。」／「ぢや、何になの？」／「虚無だ。」／「でも、この街はオーストリアで、一番お金持の多い所よ。」／「それや、こんなに人の胆を抜けば、金は儲かりますね。氷河で儲けてるんだ。」

一七二④一本の↑一枚の ④―⑤小鳥の声の……栗鼠だけが、↑並んだ一面の白いテーブルには、一人の人影もなく、卓布の上を這う山蟻がだんだん大きく矢代の眼についた。／氷河の鑒の鋭さを身に受けた、繁みの中は、小鳥の囀りやまぬ泉であつた。／矢代と千鶴子は、テーブルから放れて園内を廻つた。ところどころの木蔭に休んでゐる人々の塊でも、誰も物云ふものがあつた。ただ樹の幹から降りて来た栗鼠だけが、⑥―⑦自由にはばち這ひ競つて動いてゐた。↑自由に這ひ廻つて、小鳥とともに⑧を競つた。⑨写真機を買はうかしら。」↑写真器買はうかしら。」⑩―⑪云ふことがないのだと……見えるのだつた。↑云ふことがなくなつたと見える、と矢代は思ふと、今は、一口の千鶴子の無意味な言葉も、彼には、両手で受けたいほど尊く見えて来るのであつた。⑫写真お上手ですか。」↑

写真は上手いんですか。」

一七三①撮れればいいわ、……思ふんですものね。」↑写ればいいわ。あなたも撮つて上げてよ。」②⑤と身の廻りで……シュウパアシックスを買った。↑身の廻りで、動く花のやうに頬笑む千鶴子を、矢代は涼風におもむろな微笑をもつて、頷くばかりだった。／写真器を千鶴子一人に買はせるのは、気の毒であつたから、矢代は等分に金を出し、二人で一つのシュウパアシックスを買った。彼の氣転に、千鶴子は可憐なほど鮮かな喜びを見せながら、⑥⑦お別れするときで……しまつときだと思ふの。」↑お別れしたときよ。大切にしまつとくの。」⑧②かう云ふ千鶴子に……旅の情緒にすぎない。↑間もなく二人は必ず別れるのであらうと思つても、矢代は別に悲しみを感じなかつた。異国の旅の友情であつてみれば、日本にゐるときの、互の過去さへ、すでに白紙として消し捨てられて、不思議と思はぬ共通の淋しさがあつた。⑬チェーン、こんなに……珍らしいわ。」↑チェーンの音まで、こんなにはつきり聞える街つて珍らしいわね。」⑭教会堂の……云つた。↑ナシ

一七四①③どの街にも……高く聞えた。↑どの街にも人は通つてゐなかつた。静な通りに、生き生きと影だけ明瞭に呼吸してゐる、この大都会の奇怪さも、氷河を見馴れた矢代には自然で

あつた。スキイの道具も冬待ち顔で、店頭に並んでゐたが、どの店も時計の音だけ、際立つて聞えるやうな家が多かつた。

④①一七五①昼食の後……誰も来なかつた。↑昼食のときも、ホテルには人がゐなかつた。矢代は千鶴子とバスで山の麓まで行くと、ケーブルに乗り換へ、終点から降りて頂上へ登つていつた。

一七五②樹の一本もない山路である。路の両側には↑樹のない山路の両側は、③地を這つたねぢれた……花の袋をつけてゐた。↑地を這つた小さな灌木で、一面に細かな花をつけてゐた。

⑥一面のサフラン……牛は首の鈴を↑サフランの花の満ちた、麓の牧場から登つて来た牛が、首の鈴を⑦ときどき↑ナシ

⑧①⑨靴底に痛みを……低くなつて来た。↑靴底に痛みを感じる石ころ道になると、スキスの山に流れる雲もだんだん低くなつて来た。⑩このあたり、↑ここ、⑩まだだわね。↑ナシ

⑪山山の連りをぐると見廻す千鶴子の胸の黄色な↑山山を見廻す、千鶴子の黄色な⑭そこで買ひ、千鶴子と頒け持つて↑買ふと、千鶴子と二人で分けて

一七六①③向うの山頂へ……決心がつきかねた。↑向ふの山の頂に出られないといはれたので、思ひ出のため、一度そこを渡つてみようといふので、二人は準備したのである。④そこの

氷河を……仰言つてましてよ。↑その氷河を渡つたとか、云つてらしたわ。 ⑧―⑨その美しいことつて、……見ませうよ。」

↑その美しさつたら、何とも云へないつて、云つてらしたわ。」

⑩「見るのは良いが……矢代は云つた。↑「それは見たいもんだが、夕暮だと帰りが困るな。」と矢代は当惑げに云つた。

*⑪「でも、山小舎が……その代りに、乾草の↑「山小舎があつて、そこで泊めてくれるんださうですの。乾草の ⑭いいか
しれないわ。そこで↑いいかしれないわ。ね、そこで

一七七①―⑤他人は誰も……今である。↑ナシ ⑥「ぢや、行
きませうか。……辛抱出来ますかね。」↑「あなたさへ我慢出来
れば、どこだつて、僕はかまひませんが、あなたは辛抱出来ま
すか。」⑦と矢代は……云つた。↑ナシ ⑧―⑩「あたしは

ホテルで……相談が定ると二人は↑「あたしはその方がいいわ。
チロルへ来たからには、チロルらしい方が、どんなにいいか知
れないぢやありませんか。」／「ぢや、行きませう。」／二人の相
談がまとまると、矢代も千鶴子も、 ⑩密蜂の群れが山路の両
側で↑密蜂の群が、径の両側に ⑪―⑭ドイツの国境の……

見えて来た。↑爛紫色の屏風のやうな、ドイツの国境の岩山は、
下に深い溪谷を思はせる白雲を棚曳かせ層層と連つて現れた。
／しばらく行つたところに、教へられた氷の海が、山と山との

間に押し流れて見えて来た。

一七八①「ああ、あれが……渡るのね。」↑「あれがさうだわ。」

*②千鶴子は云ひながら……鋸の齒の↑千鶴子は鋸の齒の ③

―④氷河は、かすかに……見降ろしながら、↑氷河を見降ろし
ながら、矢代の手に片手を触れた。 ⑤「奴はなかなか危険だ

ぞ。」↑あれは危険だなあ。」 ⑤と呟いた。↑ナシ ⑥―⑦あ

たしの後について……お上手なの。」↑あたしの後について渡つ
てらつしやいよ。」 ⑧さう云はれては↑さう云はれれば、 ⑨

―⑩鋭い歯形の起伏を、……流れてゐた。↑鋭い峰の起伏を、
二町も連ねた歯並であつた。 ⑩靴のこらぬ……履き込み、↑

靴がこらぬやうにと、靴の上から履き、 ⑫尾根は矢代が先に
立つて、↑峰は矢代が先に立ち、 ⑫―⑬後の千鶴子の……渡

り越すうちに、↑後から来る千鶴子の足場を造つて渡つた。／
そのうちに、 ⑬峰と峰の↑峰と峰との ⑭一つこつて……

…断層が、ガラスの↑一つこれば、どこまで落ち込むか分らぬ
断層が、丁度、ガラスの

一七九①口を開け、↑口を開けて、 ①―③もう草もなく、……

不規則な氷の群峰を↑三つ四つも二人は越すと、もうあたりは
全く氷ばかりの歯となつた。／矢代は氷の斜面の急な部分を、
なるたけ迂廻するやうにして、現れて来る新しい氷の群峰を、

③―④進まねばならなかったが、……用心をするのだった。↑

進まねばならなかった。⑤見たときは狭かったやうだけど、

↑見ると狭いやうだったけど、⑤ほんとに↑ナシ ⑥云つ

た。↑足場を登った。⑦さうでもないなア。……汗ですよ。」

↑さうでもないですね。これ、汗が出て来た。」⑧「あたしも

よ。……撮りませうね。」↑「写真を撮りませうよ。」

⑨―一八〇②引き上げられながら……見えるばかりである。↑

ナシ

一八〇③鈍い氷の斜面が現れると、二人は腰を↑鈍い傾斜の氷の
面は、二人とも腰を ③―④ずるずるに降りた。鋭い氷山

はときどき↑ずるとにたつて降りた、ときどき、鋭い氷山は、

④その穴から向うをにる千鶴子の姿が↑穴を透して千鶴子のに

る姿が ④―⑤尾根の描く氷の歯の先端は、↑氷の先端は

⑤鈍く↑ナシ ⑤―⑥それぞれの姿態の鋭さで↑一つづつ、

夫々の姿で鋭く ⑦動かないで。↑動かないでゐてちようだ

い。」⑧姿↑姿勢 ⑧―⑨割れ目の↑ナシ ⑨覗き込みな

がら↑覗きながら ⑩この次、洞があつたら、そこからち

らを↑洞穴があつたら、向ふから ⑩一つ↑ナシ ⑫―⑭

細かい砂を……放射してゐた。↑氷河の表面は、砂を含んで、

うす汚れて見えたが、足場を造る度に、壊れた断面から新しい

輝きが現れた。

一八一①先に↑先きへ ①さう仰言つて。↑ナシ ②見てと

つて云つた。↑見たのか云つた。③お上手ですか。↑上手い

んですか。」④でも↑ナシ ④お上手らしいわ。」↑上手よ。

お疲れになつたら、仰言つてちようだい。」⑤少しづつ……特

性かな。」↑あなたより少しづつ負けるのかな。」⑥云つて↑ナ

シ ⑥微笑をもらしたかと↑頬笑んだかと ⑦受けとめ、

……にり下つた。↑受けて、微笑したまま氷の面をにり下つて

来た。⑦―一八二⑨下にゐた矢代は……浮雲を支へてゐた。

↑ナシ

一八二⑩―⑬「どつかで……召し上れ。」↑「サンドキツチ食べま

せうよ。ね一つ下さらない。」↑矢代は腰に手巾で吊したサンド

キツチを揚げながら、／「こんな物を食べてゐて、断層へ落ち

込んだら、そのまゝですよ。」／「でも、あたし、かういふ所が

好きなの、あなたも召し上れよ。」⑭―一八三①手を延ばして

……思ひであつた。↑ナシ

一八三②監督だからな。」↑監督だから、よしますよ。」③軽く笑

ひながら……矢代を見て、↑ナシ ⑤今度は自分が先に立ち、

氷の↑先きに立つて、サンドキツチを食べると、また次の氷の

⑤―⑥カメラを千鶴子から↑千鶴子からカメラを ⑦―⑧氷

の尾根の線に……矢代は、もう身を↑もう頭は登り降りの運動で、ただ汗が流れて来るばかりだった。／千鶴子と前後しながら、さらにまた幾つも峰を越すと、もう矢代は、身を ⑨物云ふのもだんだん億却になつて来て、↑彼は物云ふことさへ億却になつて、 ⑨開いた断層も↑開いた底知れぬ断層も ⑨

―⑩感じなくなるのだつた。↑見えなくなつた。 ⑪「お疲れになつて？」↑「お疲れになつたの。」 ⑫千鶴子は……訊ねた。

↑千鶴子は、氷河の中の三分の二ほど来たとき、氷の牙に跨がつて矢代を見降した。 ⑬―⑭彼女の垂らす……強い白光に↑千鶴子の垂らすバンドに擱つて登つた。あたりの氷の白光に、一八四①登られちや↑登られては、 ②冗談にまぎらせて……氷

河の尾根を↑と矢代は呟いた。事実、氷河の峰を ②―③疲労の様子 of 少しもないのを見ては、↑少しも疲労の様子の現れないのを見ると、 ③胸に↑ナシ ⑤これも冗談とはいへ、

↑冗談に云ふ千鶴子の言葉も、 ⑤打つやうに……感じられた。↑打つやうであつた。 ⑥稲妻形に……その割れ目に↑氷の面

を稲妻のやうに走つてゐた。割れ目に ⑥―⑦遅れつつ呼吸を途切らせて↑遅れ遅れ呼吸をとぎらせつつ、 ⑦何んとかなく↑ナシ ⑧勝ちまさつて来るのだつた。↑勝つて来た。 ⑨

千鶴子さん↑ナシ ⑩気持ちのまま↑気持ちで ⑩―⑪向

けて云つた。……負けた良人が↑向けた。千鶴子が峰から振り向いた瞬間、もう彼はシャター^{シャッター}を切つて、二度目の千鶴子に手まねきしてゐるポーズをさせたが、何となく負けた良人が ⑫―一八五①感じ、矢代は……並んで立つた。↑感じて、矢代はひとり微笑をもらすのであつた。

一八五②もう↑ナシ ③―⑦「何んとか……二人は最後の↑千鶴子と矢代は、最後の ⑦―⑧手を取り合つた。そして↑手を取り合ひ、 ⑧かけ声もろとも↑かけ声で、 ⑩―⑪と矢

代は汗を……スススよ。」↑と笑つて汗を拭いた。／「もうここならスススよ。」 ⑫また路にかかつた。山頂より↑歩いた。頂

より ⑬丸木を組んだ……千鶴子は↑丸木を組んで山小舎が見つかりと、千鶴子は ⑭―一八六⑤小舎の中には……訊ね

てみると、↑牛のいつぱい並んでゐる土間を通り、またドアを開けると、客間らしいテーブルのある部屋で、老婆が一人縫物をしてゐた。千鶴子はフランス語で、今夜どこでも良いから泊めて貰ひたいと頼んでから、羊のゐるのはどこの谷間かと訊ねてみた。

一八六⑤ゆるやかに見える下の山峽を↑ゆるやかな山峽を ⑥ここの……来ますよ。」↑この下の谷間へ羊が集るだらう。」

⑦と教へてから古風な柱時計を↑と云つて、柱時計を ⑧―

⑩「もうすぐ……外へ出て行つた。↑ナシ ⑪—⑫もうその日の……食べ始めた。↑その日の宿をとつたからは、もう二人は安心であつた。小舎から出て、山峡の牧場の見える径の方へ行くと、サフランの花の中に坐り、二人はサンドキツチを食べ始めた。 ⑬お天気だつたから↑お天気だから ⑭—⑮良いことをしましたわ。↑良いことをしたわ。

一八七①—一八九②サフランの花の中で……下へ下へと流れて来た。↑花の上へ寝たり起きたりした。／夕日が雲間に光線を投げかけたところ、下の牧場から、羊を呼ぶチロルの唄が聞えて来た。それは喉^{のど}の擦り枯れたやうな声であつたが、雲と氷に漂ふ牧人にふさはしい、さびれた哀音をもつて流れて来た。／唄につれて、放^{はな}れてゐた羊の群が、首の鈴を鳴らせつゝ、徐々に谷間に集つて来た。初めの間は、入れ交る白雲のやうに見えた羊の群も、幾千疋となく合すると、間もなく、大河の崩れたごとく山峡を下つて来た。

一八九②—③矢代は胸の……るるるるる——↑矢代は胸の下が、ぞくぞく冷えて空虚になる思ひであつた。／日没の光りに、山山はほの明るく、頂を染めてゐた。羊の大群の流れる鈴の音が、山峡に反響してゐる中を、チロルの唄は、夢見るやうにつゞいてやまなかつた。／「ルクルクルク、ルルルルルル——

ルクルクルクルク、ルルルルルル」 ⑧云ふとまた↑云ふと、すぐまた ⑧見降ろした。↑覗きつゞけた。 ⑧—一九〇⑤まだ末の方で……見合せたが、↑後方で拵つた羊の団塊は、犬の声に緊めつけられつゝ、押し流されて速度を早めていった。／羊の群も、谷間の曲りの中に見えなくなると、初めて、矢代と千鶴子は顔を見合せたが、

一九〇⑥—⑩流れてゐた。……夕食のときも二人は↑流れ、遠ざかる鈴の音だけがだんだん夜の中に吸ひ込まれた。／山小舎に帰つて、夕食をとるときも、二人は ⑩食事を終ると↑ナシ ⑪—⑫もう彼は動くことも↑彼はもう動くことが ⑫—⑬動かすらしい音が……もたれかかつたまま峽間を↑動かす音がした。／千鶴子も流石に疲れたらしく、椅子にもたれかかつて、山峡を ⑭つやつやとしてゐて少し窪んだ眼が↑つやつやとして、少し窪んだ眼も

一九一①ありませんでしたわ。↑一生になかつたわ。 ②一生に↑ナシ ②恐ろしくなつて来ましたわ。↑恐^{こは}くなつて来ましたのよ。」 ③銀の↑ナシ ③小声で↑ナシ ⑤と矢代は……と思つた。↑ナシ ⑥こんなことつて、↑こんなことが、 ⑦—⑧矢代は……出ていった。↑「駄目だな。そんなこと云つちや。」と矢代は笑つて遮つた。／隣室から冷たい空気に混つ

て、乾草の匂ひが流れて来た。千鶴子は矢代の顔を見詰めてゐてから、つと立ち上ると、黙つて外へ出ていった。⑨星は……放つてゐた。↑ナシ

⑨—⑫戻りの遅い……眼についた。

↑千鶴子の後から外へ出てみた。初めは、彼女の姿は分らなかつたが、そのうちに、氷河の流れの方を向いて、ぢつとお祈りしてゐる千鶴子の拝跪^{ひざまづ}いた姿が眼についた。⑫—一九二⑫矢

代は知つてゐたが、……来るのであつた。↑矢代も聞いてゐたが、今、眼の前に祈つてゐる静かな彼女の姿を見ては、夜空に連る山山の姿と共に打ち重なり、神厳な寒氣に彼の胸も緊きしめられた。／千鶴子の立ち上つて来るまで、彼も祈りに近い氣持ちで、空の星を仰いでゐた。もう云ふことも為すこともなかつた。／心は古代を逆のぼる柔らぎに満ちて来て、身が塊りのまま、山上に立つてゐるのも忘れるのであつた。

一九二⑬いらしたのね。↑いらしたの。④—⑤と千鶴子は……流れてゐた。↑千鶴子は、矢代の傍へ歩いて来た。矢代が黙つて草の上へ坐ると千鶴子も並んで坐つた。／昼間渡つて来た氷河が、星の光りに牙を浮き立てて、左の方に白白と流れてゐた。(矢代の巻終) ⑥パリの久慈……来てゐた。↑千鶴子を矢代に紹介したパリの久慈から手紙が来てゐた。⑦⑭忘れるほど↑忘れたほど

一九三⑦⑭このごろ困つた↑このごろまた困つた ⑦知つてゐる↑覚えてゐる ⑨ゐるより君の↑ゐるよりは君の

一九四⑪われわれ若者の上に↑ナシ

一九五⑫矢代耕一郎様↑矢代耕二様 ④帰らうかとも思つた。

↑帰らうと決心した。

一九六④形で流れず、油色のままに↑形のまま紫色に

一九七⑫⑭抽象物↑象徴的

一九九⑭それがヒューマニズムの……筈はない。↑それがヒューマニズムといふものだ。それが知識階級の批判精神といふものだ。」

二〇〇⑧空を仰いで↑ナシ ⑨⑮ささず歩ける↑ささずに歩ける

⑪—⑫また始まつたぞと思つたらしく↑ナシ

二〇一①君のは↑あなたのは ②降り籠められた鬱陶しさに↑ナシ ⑦なりかかつてゐる↑なりつつある ⑧眼の色↑視線の色 ⑨「ふん、↑「さア、⑩構へで先に立ち、奥まつた↑沈黙で先に立ち、一番奥まつた ⑪—⑫もう分らん。われわれには。↑ナシ

二〇二①やつてゐるね。↑やつてゐますね。」 ①と東野は少し心配な顔だつた。↑ナシ ④⑮世界のそのまゝが↑世界そのまゝが ⑦この間までは↑むかしは ⑦—⑧先日まで……

無くなつたのですかね。」↑在つたものまで無くなつたのかしら。」
⑩すると、東野は、↑ナシ ⑪でもないよ。」↑でもありませんよ。」
⑫と先回りを↑と東野は先回りを ⑬いつか東野の……思ふと、↑ナシ ⑭と訊ねた。↑ナシ

二〇三①やつ↑もの ①測る↑測定する ②使はない……多
いからな。↑使はないやうにしてゐるのです。それは誤るだけの
効果の方が多いからです。 ③知識といふ……僕はそんなの
を、↑知識はないと思つてゐられるんでせうが、僕はそのやう
な見解の知識を ④思つてゐるんですよ。↑思つてゐるん
です。 ⑤―⑥教へた方へ……問題ぢやない。」↑教へた右か左へ
いつてしまへば良いのです。どつちが良いか悪いか、そんなこ
とは神さまだつて知らんでせう。」
⑪何んですか↑ナシ ⑪
いはばまア↑ナシ ⑫といふやうなものまで↑といふものを、
⑫―⑬論理を……思つてらつしやるんですな。」↑論理を無用の
長物にしてらつしやるんですな。」
⑭とふと口を↑ふと口を
二〇四②さア、いよいよ美味しくなるぞ、↑「さア、いよいよ
美味しくなくなるぞ。」
④スパゲッティ↑サン・フロマージュ
⑤どういふものか、↑ナシ ⑦フロマージュ付きの鰻飴↑フ
ロマージュ ⑦食べないんですよ。」↑食べないんだ。」
⑧ぢ
や、↑ナシ ⑨鰻の薄味は好きですよ。↑ナシ ⑩まア↑

ナシ ⑩それだよ。」↑それだ。」
⑫妙な風に↑ナシ

二〇五⑧―⑨「それやあなたも……やるかな。」↑「たしかにあな
たはもう神経衰弱だ。あなたは右も左もむしやむしや神経衰弱
で食ふといふのですか。」
⑪東野は↑と東野は ⑫といふ
やうに……笑つた。↑といふかのやうに落ちつき払つて微笑し
た。 ⑭―二〇六①作つた↑作成した

二〇七①僕らは↑われわれのは ③見る思ひで、久慈は静か
に↑見るやうに、久慈はおだやかに ⑦―⑧大迂回↑大旋回
⑨「僕らの↑「われわれの

二〇八①はつたりこそ真理だ。分るまいが。↑ナシ ⑦⑤議論
を↑議論は ⑦―⑧料理が死んでしまふよ。↑料理の味を殺
すからね。 ⑪僕たち↑われわれ

二〇九①無茶だあなたは。↑ナシ ②食べてからにしようよ。
↑食べてからにしませう。 ②⑤云ふことは↑云ふことを
③―君は↑君は ⑥落してみせるぞ。↑ナシ

二一〇①振動めいたものが脳に響き↑振動がいちいち脳に響いて
二一一⑤あ奴だからな。↑あ奴だからね。

二一二⑫今度は彼から↑ナシ

二一四①僕らは↑われわれは

二一五③ここや↑ここでは ④僕らは↑われわれは ⑧こ

奴も阿呆↑こ奴阿呆 ⑨僕たち↑われわれは

二一六②言葉も聞えない↑言葉ももう聞えない ⑪「僕らは↑われわれは

二一七⑦僕ら↑われわれ ⑧↑⑨そのどこに誤りがあるんだ。

↑ナシ ⑬久慈は↑と久慈は

二一八⑩僕ら↑われわれ ⑫どういふことかね。↑どういふことだ。 ⑭少し↑ぶるぶる

二一九①「僕らが↑「われわれが ③↑⑤「しかし、……日本

をね。」↑「こんなに東洋人が軽蔑されてゐて、こんなに植民地を植ゑつけられて、なほその上に彼らの知性を理想としてこれを守ることが唯一のヒューマニズムの道なら、それなら、東洋のヒューマニズムはどこへ行つたのだ。」 ⑧↑⑨僕らは……信仰するんぢやないか。」↑われわれはその理想を信仰するんだ。」

⑩「自分が↑「われわれは ⑪返すのかね。……習練だよ。」

↑返すのか。」 ⑫道といふものだろ。↑道といふものだ。

二二〇③君に↑君には

二二一⑦刻刻變つてゐるんだな。↑ナシ ⑬出来るが、思想も

↑出来るやうに、思想にも

二二二②さうだな。↑さうだよ。 ③技術家だよ。」↑技術家だ。」

⑩ブルジョア↑三井三菱 ⑫増やすのか。」↑増やせといふの

か。」

二二三①円心主義↑○○主義 ③ものぢやないよ。」↑ものぢやない。」 ④円心主義↑○○主義 ⑤と久慈は↑久慈は ⑧

後朱雀天皇↑後三条天皇 ⑩円心主義↑○○主義

二二四②↑④僕らはこんな……あれば——」↑さうなれば、自分をつまらなく思はせたヨーロッパが、神さまみたいに有り難くならうといふものだ。支那も印度も真似するに定つてゐる。ところが、来てみればヨーロッパはこれだつたのだ。ここがヨーロッパの文化の中心なんだぞ。」

二二九⑤これで↑ナシ ⑨出来んよ。」↑出来んよ。」と矢代は日本語で苦しげに唸つた。

二三〇⑤芸無し猿の↑芸無し

二三二④↑二三三①と東野は云つた。↑ナシ

二三三⑤脱いだな。↑脱いだか。 ⑤僕らは↑われわれは ⑥

ゐられるもんか。」↑ゐられなかつたかもしれないぞ。」 ⑪と久

慈は↑と久慈も

二三四③↑④ときどき僕にもあるんだが。↑ナシ

二三六②嘘ぢやなからう。」↑嘘ぢやなからうな。」 ④なささうだよ。」↑なささうだ。」 ⑤と矢代は↑と矢代も ⑤また↑ナ

シ ⑥僕たちは↑われわれは ⑥なくなつたよ。↑なくな

つた。 ⑩と訊ね返した。↑と訊ねた。 ⑪と矢代は……上げ
てゐた。↑ナシ

二三七⑪踊れないや。↑踊れない。」

二四〇⑩すぐ来たビルを見ると↑ビルが来たときは ⑪外へ出
てから、↑外へ出ると、

二四二⑦矢代は……云つた。↑ナシ ⑫僕らが↑われわれが

二四三⑩まさかと思つてゐたこととて↑ナシ ⑬その音から↑
ナシ

二四四⑥上りの額を↑上りを ⑭↑⑦⑮下つていった。↑下つ
て消えていった。

校異 Ⅱ

一七〇⑤雨の行方↑雲の行方

一七二⑦日光の↑日光に ⑩ぱちぱち↑びちびち

一七六⑧云つてらしたわ。それを↑云つてらしたわ。ね、それを

⑪泊れるんださうですよ。↑泊れるんださうですよ。

一七八②千鶴子は↑と千鶴子は ⑥後に↑後を ⑬⑮峰と峰
の↑峰と峰との

一七九⑬苦笑するのだつた。↑苦笑をするのだつた。

一八〇④尾根の↑尾根を

一八二①「あたしここ↑」あたしもここ

一八七⑩見ると、↑見てゐると、

一九二①心は古代に↑心は古代を ⑦⑮忘れるほど↑忘れたほ
ど

一九三⑦⑮このごろ困つた↑このごろまた困つた

一九五②⑮矢代耕一郎様↑矢代耕二様

一九七⑫⑮抽象物↑象徴物

二〇〇⑨⑮ささず歩ける↑ささずに歩ける

二〇二④⑮世界のそのまが↑世界そのまが

二〇三⑭⑮とふと口を↑ふと口を

二〇八⑦⑮議論を↑議論は

二〇九②⑮云ふことは↑云ふことを

二一九③⑤「しかし……日本をね。」↑「こんなに東洋人が軽蔑
されてゐて、こんなに植民地を植ゑつけられて、なほその上に
彼らの知性を守ることが唯一のヒューマニズムの道なら、それ
なら、東洋のヒューマニズムはどこへ行つたのだ。」 ⑪⑫⑬⑭⑮練習↑

練習

二二四②④⑮僕らはこんな……あれば——↑さうなれば、自
分をつまらなく思はせたヨーロッパが、神さまみたいに有り難
くならうといふものだ。支那も印度も真似するに定つてゐる。

ところが、来てみればヨーロッパはこれだったのだ。ここがヨーロッパの文化の中心なんだぞ。」

二二九⑨出来んよ。」↑出来んよ。」と矢代は日本語で苦しげに唸った。

二三六⑤と矢代は↑と矢代も

二四二⑦矢代は↑と矢代は

二四四⑥―⑦⑨下つていった。↑下つて消えていった。

校異 Ⅲ

一七〇⑤雨の行方↑雲の行方 ⑤姿絵↑姿の絵 ⑧根を見て

↑根を見ると

一七二⑥上つていくのか↑上つてゐるのか ⑦日光の↑日光に

⑩ぱちぱち↑ナシ ⑫―⑬両手で受けたく清らかに矢代には

↑矢代には両手で受けたく清らかに

一七六⑧云つてらしたわ。それを↑云つてらしたわ。ね、それを

⑪泊れるんださうですよ。↑泊れるんださうですよ。

一七七③その無邪気さ↑その美しさ ⑫流れてゐる。↑流れてゐた。

一七八②千鶴子は↑と千鶴子は ⑥後に↑後を ⑨―⑩鋭い

齒形の起伏を……流れてゐた。↑鋭い尾根の起伏を、二町も連

ねた歯並であつた。 ⑬⑤峰と峰の↑峰と峰との ⑭落ちるか↑落ちるのか

一七九①―②もう草もなく……なつて来ると、↑すると、いつの間にか二人の周囲はまったく氷ばかりの歯となつて襲つて来た。

③氷の↑ナシ ⑤ほんとに↑ナシ ⑬苦笑するのだつた。

↑苦笑をするのだつた。

一八〇④尾根の↑尾根を

一八二①「あたしここ↑」あたしもここ ④音をたてつづけ、

↑音をたてつづけて

一八五⑦提案のまま↑提案のままに

一八七⑩見ると、↑見てゐると、

一八八①へんなものだ。↑ナシ

一八九⑪獣類の↑ナシ

一九二①―②心は古代に……来るのであつた。↑すると、心は古代を逆のぼる柔ぎに満ちて来て、塊りのまま山上に立つてゐる自分の位置も忘れて来るのであつた。 (未完)

*

*

*

前号訂正

校異Ⅱ・Ⅲ 六二⑬⑤……⑤はなし 六四⑥⑤……⑤はなし

(昭五四 日文学)